

るような管理的能力が求められている。変革のときを知らせるシグナルに耳を傾けることは自己啓発にとって不可欠な感性であることを認識すべきである。

最後に看護師学校（3年課程）の看護教員の養成とキャリアアップに必要な教育システムの再構築について述べ稿を閉じたい。昨年実施した調査によると看護教員に求められる能力の自由記載から「看護実践能力」「看護教育能力」「マネジメント能力」「コミュニケーション能力」そして「感性等」が抽出された（附記参照）。しかし、今回の調査では看護教員の教育経験年数によるキャリアアップに関する構成要素では5年以下では看護教員養成研修で培った能力を踏襲し教員として受容・模倣のレベルで対応し、6～9年は中堅として看護実践能力に裏付けられた看護教育実践能力を身につけ、さらに、看護教員として自己を尊重し、看護教育の価値を見出していた。10年以上は熟達者として看護教育の評価能力や社会への柔軟な適応能力を身につけ、マネジメント能力・看護教育の総合力を重視し、自分の属する機関の変革に伴う管理能力を追求する傾向がみられたことから、看護教員経験年数による段階的ニーズがキャリア形成に反映することが示唆された。本研究の成果が今後の看護教員の養成ならびに現任教育システムの再構築に活かされることを期待したい。

しかし、経験年数による他力的な段階的研修を設定することは必ずしも適切な教育活動とはいえないと考えられた。つまり、概念図試案（図6）にも提示したように、看護教員の継続教育システムを構築する上で、自己啓発によるふくらみをもたせ、社会の動きに敏感かつ柔軟に適応できるような看護教員の育成こそが期待されると考える。今回、「語り」のなかに多く語られていた目標管理を掲げるだけでは本来の教育力が向上するかは若干、疑問が残った。（図6）

## 8. 謝辞

本研究を進めるにあたり、各県の医務課担当者には諸処調整をいただき、そして本研究に賛同されインタビューに際し、貴重な時間を割いていただいた看護教員の皆様に心より感謝申し上げます。なお、インタビューを通じ、今日の看護教育の課題を切々と述べていただき、現場における深刻な状況を直接、拝聴させていただく機会となりました。そして、本研究に参加した研究者も同じ看護を教育するものとして共感することも多く、貴重な体験となりました。

今後の皆様の活躍を念じ、本研究の報告が皆様の今後に微力ながら参考になれば幸いです。

## 参考・引用文献

- 1) 安心と希望の医療確保ビジョン、厚生労働省、2008
- 2) 看護の質の向上と確保に関する検討会報告書、厚生労働省、2008
- 3) 奥田清子：『今後の看護教育のあり方に関する検討会』報告書解説 厚生労働省の対応に焦点を当てて、看護教育 2011FEB.Vol52.No2 pp108-112 医学書院
- 4) 永山くに子、他：看護教員の養成とキャリアアップに必要な教員システムの再構築に関する研究、厚生労働科学研究費補助金平成 21 年度研究報告書、2010
- 5) 看護行政研究会編集：平成 21 年版看護六法、新日本法規、pp283-285,2010
- 6) 平成 21 年改訂大学設置審査要覧、pp69-118、2010
- 7) 大辞泉、平成 22 年度版
- 8) J.Fitzgerald, キャリアラダーとは何か、筒井美紀他訳 頸草書房、2008
- 9) 中山洋子（代）：「看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究報告書」 p 5、文部科学研究費補助金研究、2010.2
- 10) 専任教員養成講習会および教務主任養成講習会ガイドライン、厚生労働省 2010.4
- 11) P.Benner, 監訳 井上智子、インタビューでの質問と調査、「ベナー看護ケアの臨床知」 p 750、医学書院 2005
- 12) 川喜田二郎：KJ 法、中央公論社、1986
- 13) 佐々木誠他：教師の感情規則に関するノート ～Word Miner を分析ツールとして～、岩手県立大学社会福祉学部紀要 2006.3 Vol.8 No.2 pp61-67
- 14) 永山くに子、他：看護教員の養成とキャリアアップに必要な教員システムの再構築に関する研究、厚生労働科学研究費補助金平成 21 年度研究報告書、p22 2010
- 15) Keiko Sakai,et al : Study regarding the Proficiency of Nursing Teacher and Stressor –Targeting Nursing Teachers at Special Technical Schools–,Journal of The Tsuruma Health Science Society Kanazawa University,Vol..30(2),pp113-124,2006.
- 16) 【座談会】看護教員養成ガイドライン活用と発展、看護教育 2011FEB.Vol52.No2 pp90-98 医学書院
- 17) Peter F. Drucker：上田惇生他訳、非営利組織の経営、ダイヤモンド社、1995

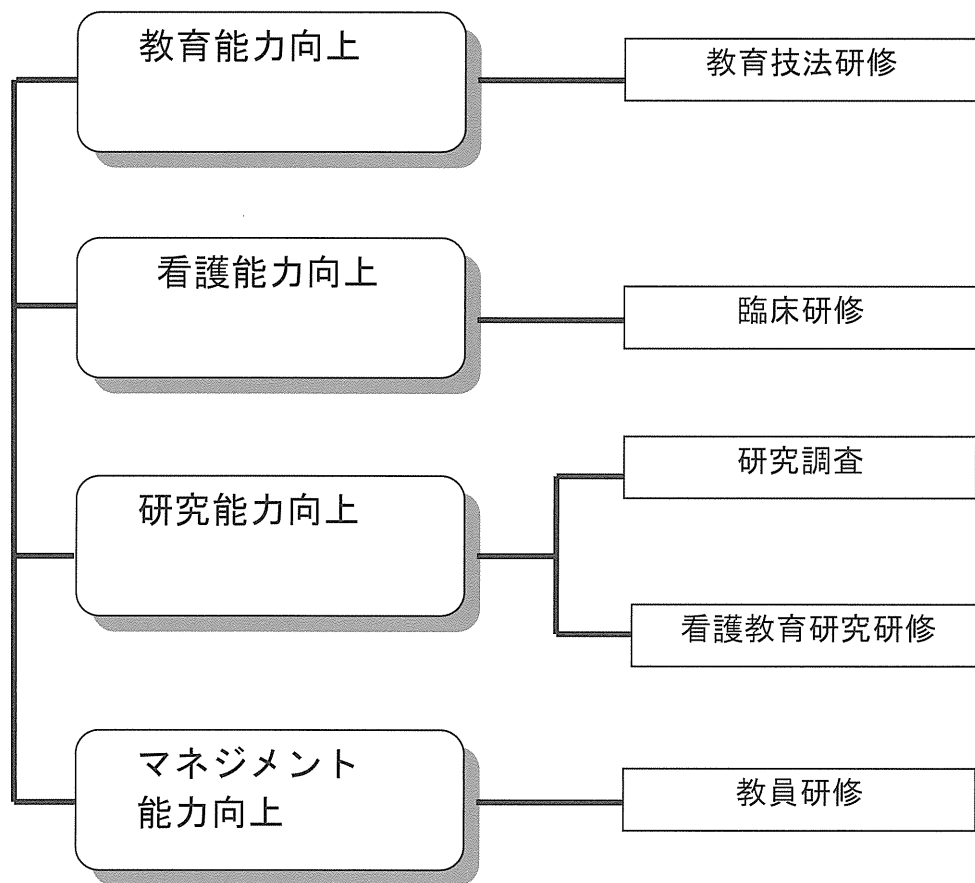
## 資料

1. 表 1. モデル校職場研修体系図
2. 表 2. 専任教員のキャリア別達成目標
3. 図 1. 調査協力校の国内分配置図
4. 表 3. 調査協力者概要一覧
5. インタビューガイド
6. 表 4. 専任教員のキャリア別到達目標を導入している看護教員のキャリアアップの要素
7. 図 2. 専任教員のキャリア別到達目標を導入している看護教員のキャリアアップの要素と能力
8. 表 5. 目標達成能力に応じた 4 つの類型と看護教育経験年数別の「実践と思い」

9. 表 6. 看護教員経験 5 年以下の構成要素クラスター分析結果  
別表 6-1、6-2、6-3 6-4, 6-5、6-6
7. 図 3. 看護教員経験 5 年以下の構成要素クラスターの成分スコア布置図
8. 表 7. 看護教員経験 6～9 年の構成要素クラスター分析結果  
別表 7-1、7-2、7-3、7-4、7-5
9. 図 4. 看護教員経験 6～9 年の構成要素クラスターの成分スコア布置図
10. 表 8. 看護教員経験 10 年以上の構成要素クラスター分析結果  
別表 8-1、8-2、8-3、8-4、8-5、8-6、8-7、8-8
11. 図 5. 看護教員経験 10 年以上の構成要素クラスターの成分スコア布置図
12. 図 6. 看護教員の養成と経験年数別キャリアアップ要素の概念図

附記 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金研究報告書「看護教員の養成とキャリアアップに必要な教育システムの再構築に関する研究報告書」(永山くに子他) より抜粋した図 1 から図 5

表1 モデル校職場研修体系図



※ モデル校職場研修体系図より一部改変

表2 専任教員のキャリア別到達目標

経験年数	1～2年	3～5年	6～10年	11年以上	
項目	新人教員	一人前教員	中堅教員	熟達教員	
目標能力	看護教員として基礎的な実務能力	積極的に研修に励み看護教員としての実務能力の向上に努める	看護教員としての専門性を高め、リーダーシップを発揮し、後輩教員の指導ができる	学校運営に必要な知識を用いて、看護教育における諸問題を解決できる	
教育能力	教育課程	1.教育課程編成の基本と原則、運営方法を理解できる。 他2項	1.看護並びに教育情報に関心をもち必要な情報を収集整理できる。 他3項	1.社会の情勢と専門領域の情報に精通し、教育目的、目標に沿った教育課程の編成ができる。 他2項	1.社会の情勢と看護教育の動向について展望でき、保助看法、養成所指定規則に基づいた教育課程の編成ができる。 他4項
	授業設計・実施	1.教材観・学習者観・指導観のもとに授業設計ができる。 他3項	1.授業設計の基本をふまえて意図的な計画ができる。 他5項	1.社会の情勢と専門領域の情報を積極的に収集し、授業に役立てることができる。 他4項	1.学生集団の学習状況を的確に判断し、効率的・効果的な授業を展開でき、スタッフに指導できる。 他5項
	学生指導	学生の不安・悩みに気づき、受容的態度で聴ける。	1.学生の不安・悩みに気づき、受容的態度で聴ける。 他1項	1.学生の不安・悩みに気づき、受容的態度で聴ける。 他2項	1.適切な学生指導ができるように、スタッフを指導できる。 他3項
看護能力	対象に必要な看護を提供できる				
研究能力	1.専門分野の最新情報を収集し、教育に活用できる。 他1項	1.専門分野の研究論文を批判的に読むことができる。 他1項	1.日々の教育活動の中に課題を見出し、研究に取り組める。 他1項	1.研究活動のリーダーとして指導力を発揮できる。 他3項	
マネジメント能力	1.学校運営の一員としての責任を自覚し、規律を遵守できる。 他2項	1.学校運営の一員としての責任を自覚し、服務規律を遵守できる。 他4項	1.組織目標の達成に向けて、率先して行動しリーダーシップが発揮できる。 他3項	1.保助看法、養成所指定規則に基づいた効率的・効果的な学校運営に向けて展望を持ち、スタッフを指導できる。 他3項	

※ 専任教員のキャリア別達成目標より一部改変

表3 協力者概要一覧

協力校	教員数	人数 (%)		
		看護教員経験 5年以下	看護教員経験 6～9年	看護教員経験 10年以上
1	5	1	3*	1
2	15	5	7	3*
3	8	3	2	3
4	5	—	5	—
5	8	2	2	4
6	14	3	3	8
7	9	5	1	3
8	6	1	1	4*
9	7	2	1	4*
10	10	7	1	2
モデル校1	9	1	3	5
モデル校2	6	3	2	1*
計	102(100)	33 (32.3)	31(30.4)	38(37.3)

※ \*は教務主任

表4. 専任教員のキャリア別達成目標を導入している看護教員のキャリアアップの要素

カテゴリー	表札	ラベル
1. 教員として教育研修の必要性	教員として基本的な知識・技術について勉強し直すことが必要である	<ul style="list-style-type: none"> <li>特定の分野もちろん必要であるが、浅く他の知識や技術がとでも必要である</li> <li>他の分野を教えていくための知識や技術が必要である</li> <li>看護教員として、基本的な看護の知識や技術について勉強し直すことが必要である</li> <li>教育は、どこにでも必要なことであり、その基礎を学んでおきたいという気持ちがある</li> </ul>
	教員として学生の成長を喜びとする	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の成長が大きな喜びに感じる</li> <li>学生の成長を実感すること、現場で看護師として働く姿を見ることが、教員として励みになる</li> <li>教員として嬉しいのは、学生の成長が実感できた時、看護師として活躍している姿をみる時、エピソードを思い出してくれた時だ</li> </ul>
	教員として学生の思考を引き出すことが必要である	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導が難しいと言われている学生の指導にあたった時、どうしたらよいのかと悩む</li> <li>教員には、学生の感じていることを引き出す力が必要である</li> <li>学生の立場と指導者としての私の立場にズレがあるから、学生の行動に対する思いを聞くことが必要だ</li> <li>まず学生の話や、理由を聞くことを大事にしている</li> <li>教員は学生の考えを大切にすることが必要である</li> <li>教員として知識や技術も大切ではあるが、それ以上に相手の立場に立って考えて行動することが大事なことだと考えている</li> <li>社会経験や人生経験のない学生にとってテキストや講義を受けただけでは想像がつかないところを理解した上で、実習を指導している</li> </ul>
	教員として学生を点でなく線でみる	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の人間性を見るときに、点で見ない</li> <li>学生をできない子と思い、良い面を探せないときがある</li> </ul>
	臨床看護師として後輩を指導するのではなく、教員として学生を意識して教育にあたる	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生に対して臨床の立場とは違った指導能力を身に付ける必要がある</li> <li>教育手法について勉強する必要があると感じる</li> <li>今まで教育の対象であった新人看護師との違いを意識して、学生を指導することが必要である</li> </ul>
	臨床看護師として後輩を指導するのではなく、教員として学生を意識して教育にあたる	<ul style="list-style-type: none"> <li>臨床は応用だったが、教育は原理原則を押さえることだと、研修に行って分かって、それを行った</li> <li>臨床研修に参加することで、教員として自分の見方が変化していることに気づいた</li> </ul>
2. 看護教員研修に参加することによる教育の理解の深まり	教員研修に行くことで、臨床と教育の場で求められていることの違いに気づいた	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修は応用だったが、教育は原理原則を押さえることだと、研修に行って分かって、それを行った</li> <li>臨床研修に参加することで、教員として自分の見方が変化していることに気づいた</li> </ul>
3. 教育は教育内容・質が問われることによる困難性や挑戦	意図的な教育とするためには、スピードではなく内容・質が問われるので、教育は困難を伴うものである	<ul style="list-style-type: none"> <li>特定の分野だけで仕事をしていけばいいというわけではなく、授業や実習では幅がないといけない</li> <li>スピードではなく内容を求められるという点において、臨床実践の場と違いに慣れずに不安を感じる</li> </ul>
	難しいからこそ、挑戦したいと思う	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分でやってみて難しさを感じるからこそ、それを習得したいという気持ちで湧いてくる</li> </ul>
	教育を実践することで、教育することの困難さや準備の必要性を実感する	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の実習指導を通して自身が看護を勉強することができた経験が、臨床経験のない分野の講義に役に立つことを知る</li> <li>実際に講義を担当したことで、講義を行うことの難しさや準備に時間がかかることを実感し、他の教員が担当している仕事の量を自分がこなしていけるとは到底思えない</li> <li>慣れてくると担当する仕事の量はこなせるようになってくるが、教育として意図的・効果的に行うことは難しく、そこを解決するための勉強がしたい</li> <li>教科書やテキストに書いてあることを読むだけでは、知識も技術の不足を補えないため、指導の先生に相談しながら講義を行う</li> <li>教育的な質をあげていきたい</li> </ul>
	看護教育は優しさを相手に伝えるということを教える必要がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>どうやったら優しさを伝えられるかを行った</li> <li>手や言葉がけで優しさを感じていた</li> <li>納得した看護技術を教えたい</li> </ul>
	学生自身が知識を得、思考し、行動できる人として育つためにどうしたらよいかを考えるようになった	<ul style="list-style-type: none"> <li>成長の可能性のある学生を、ある時点で評価しなければいけないことについて悩む</li> <li>看護過程では、学生に完璧なものを求めても、ただ苦しいだけになるのではないかと感じ、教員が書きながら教えている感じのスタイルにしている</li> <li>教科書の代弁やコピーではなく、自分自身が学生に伝えたいことを学生に伝えるようにしたい</li> <li>気持ちと根拠を持って行動するという部分を教えることができない</li> <li>臨床では看護職になっていたが、看護教員の役割を意識していないといけない</li> <li>知識を得て思考して行動できる学生を育てるにはどうしたらよいかと、だんだん考えるようになった</li> <li>教員経験3年ぐらいまでは、自分がやる、お願いするパターンで、これではいけない、学生にもっと考えさせなくてはと変わっていった</li> </ul>
	看護教員として教育とは何かを考えるようになった	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導のうまくいかない学生に出会ったことがきっかけで、そもそも教育とは一体何なのだろうか考えるようになった</li> <li>臨床能力とは、看護としての基本的な知識と技術があり、自分の専門の領域の経験と経験に基づいた知識と技術があるということだと感じる</li> <li>3年課程にきたことで、同じことを教えるにも教え方が変われば、学生の頭の中に入る内容が変わることを理解し、教育の難しさと自分の看護観を持つことの大切さに気づいた</li> </ul>
自己評価の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員経験年数が増えただけで学生指導できたと言わない</li> <li>学生の感想を聞いて、ひと安心している自分がある</li> <li>自分のおもいよがりややっていくことはいけないことであると感じる</li> <li>自分のやり方を肯定されることで、ひと安心している自分がある</li> </ul>	

カテゴリー	表札	ラベル
4. 先輩・指導教員と いった教員組織の中 で育つ看護教員	看護教員は先輩・指導教員に相談する・相談できる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の学校の先生と話し合ったり、指導の立場にある教員に相談する</li> <li>・指導の先生に相談する</li> <li>・指導の先生に、世間話をするように気軽に相談ができる</li> <li>・指導の先生に、よく相談している</li> <li>・指導の先生にちょっとしたことで相談しやすい</li> </ul>
	看護教員には相談にのってくれる教員が必要だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相談に乗ってくれる先生が近くにいるほしい</li> <li>・相談にのってくれる先生が近くにいると、とても心強く感じる</li> <li>・上の先生には聞きにくいこともあるため、気軽に聞くことのできる先生にも近くにいるほしい</li> <li>・気軽に相談できる先生が近くにいる</li> </ul>
	看護教員は先輩・同僚に相談して問題解決している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導の先生に相談したり助言をもらったりして解決する</li> <li>・授業について、身近な先輩や先輩の先生に相談して、解決している</li> </ul>
	先輩教員に情緒的に依存していた 看護教員は先輩教員をモデルとする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先輩教員に甘えていた</li> <li>・勉強をしている先輩教員をみて凄いと感じた</li> <li>・経験年数のあまり離れすぎでない先生が身近にいると、教員のモデルとしてイメージしやすい</li> </ul>
5. 看護教員として看護 観、看護教育観を意 識することの重要性	看護教員として看護観、教育観、看護教育観が重要だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の看護観が大切であり、それを明確にすることが重要と考える</li> <li>・常に自分がどのように教えていこうかということ意識しておくことが重要である</li> <li>・最終的に国家試験を通して卒業したときに、どのような看護をする人に育ったかが大切であり、そのために、教員は、学生に学ばせたい内容を常に意識しておくことが重要である</li> <li>・自分の看護観なのか教育観なのか分からないが、教員は、それを持って、学生の行為の意味付けをするという役割があると実感している</li> </ul>
	看護教員として人間観が重要だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護にとって、領域に限らず、人間をどうとらえるのかという対象理解がベースとして重要な部分である</li> <li>・看護教育にとって、教員の人間観が非常に重要であると感じる</li> </ul>
	自らの看護観を意識し学生に伝えることが必要だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身の看護を見直しながら、そこを学生にどうやって伝えていこうか悩みながら過ごしている</li> <li>・教員にとって一番大切なことは、自分の看護観を意識することである</li> <li>・学生の看護観に出会った時に自分が自分を思い直すことを体験し、そこに楽しさを感じる</li> </ul>
	看護教員としての根底にあるものを意識できる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員としての根底にあるものがある</li> </ul>
6. 看護教員としてコミュ ニケーション能力、調 整能力を磨く必要性	看護教員としてコミュニケーションが大事だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員は同じ看護観や教育観ではないので、コミュニケーションが大事だ</li> <li>・看護教員1年目は何もわからない。授業で上手に伝えるために、コミュニケーションのトレーニングで教えてもらった</li> <li>・コミュニケーションのトレーニングで、まとめ方、話し方が鍛えられた</li> <li>・一番面白かった研修は、コミュニケーション研修だった</li> <li>・コミュニケーションは最初にポイントを話すことだ</li> <li>・上手に思い意見を伝えるためにトレーニングした</li> <li>・教育をするには、他者に理解してもらえよう伝えられることが重要である</li> <li>・看護教員として様々な人に対するコミュニケーション能力が大切だ</li> </ul>
	看護教員は自己主張していく職業だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育をするには、プレゼンテーション能力が重要である</li> <li>・教員の役割として自分の意見を言わなくてはいけない</li> <li>・教員3年目で、米つきバツでなく教員として自分の意見を言えるようになった</li> <li>・教員として自己の考えを主張していく職業だとわかった</li> </ul>
	情報交換・研修・学会など視野を広げることが必要だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のスキルアップのための研修に行った</li> <li>・情報交換、セミナー、学会、友達をつくるのが大切だ</li> <li>・異世界の人と情報交換を行っている</li> <li>・教員として視野を広げることが大事だ</li> <li>・他の先生との会話は情報交換の場になる</li> </ul>
	看護教員としての調整能力が必要だ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生と教員の関係性ができて実習場へ行くとうまくいく、そうでないと難しいと感じる</li> <li>・看護教員になって実習指導先との調整能力がとても必要であることを実感する</li> <li>・入職した先生方と話し合う</li> <li>・先輩・上司、病棟指導者と相談し話しあうと、人は変化していくことを経験した</li> <li>・教員は、指導者及びスタッフとの調整能力が大切である</li> <li>・指導者に対して、学生への理解があると感じ、恵まれていると感じている</li> <li>・指導者に対して、学生への理解があると感じている</li> <li>・教育をするには、次に現場との調整能力が非常に重要である</li> </ul>



カテゴリー	表札	ラベル
7. 臨床実践能力は看護教員としての教育実践に不可欠	看護教員として臨床実践能力が最低限必要である	<ul style="list-style-type: none"> <li>臨床経験のない分野について、臨床研修を通して、その分野の看護の実際を知る</li> <li>看護教員として臨床能力は欠かせない</li> <li>看護教員として、臨床での看護師としての能力は最低限必要である</li> <li>臨床看護が嫌いな教員は論外だ</li> </ul>
	看護教員は臨床経験によって教育の落としどころがわかる	<ul style="list-style-type: none"> <li>臨床での経験があると、何となく落としどころが分かる</li> <li>臨床経験がない分野では、落としどころが分らない</li> </ul>
	看護教員にとって臨床経験が教育実践の場で役に立つと感じている	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の実習指導を通して自身が看護を勉強することができた経験が、臨床経験のない分野の講義に役に立つことを知った</li> <li>臨床経験がないと教員自身が不安を感じるが、臨床経験があると学生から教員の助言を期待され安心してもらえる</li> <li>教員に臨床経験があることで、学生に安心感が生まれ、実習がスムーズに進むかどうかになんか影響すると感じている</li> <li>教員自身の安心と学生の安心のために、臨床経験は、ないよりもあったほうがよいと感じる</li> <li>臨床経験があると、教員は、学生が実習で最初につまずくことについて、自信を持って助言することができる</li> <li>臨床経験があると、実習で対象理解や指導者の言葉の要約など学生に助言することができる</li> <li>臨床経験年数の長さではなくて、臨床経験の有無が担当の分野での臨床経験が全くないと、教育する際に、教員自身が弱みに思ったり、不足を感じたりする</li> </ul>
	看護教員として臨床経験で培った知識・経験が必要である	<ul style="list-style-type: none"> <li>こだわりの技を伝えたい</li> <li>教員には臨床経験で培った知識と技術が必要である</li> </ul>
	看護教員の教育力には臨床経験能力を内包する	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育をするには、まず臨床経験があること、知識を熟知していることが重要である</li> <li>教育力の中に、臨床経験能力が入ってくる</li> <li>臨床研修があることで、教育の素地を作ることができる</li> </ul>
	看護教員として臨床のことをわかるためには臨床研修に参加する必要がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習場所である病棟での研修を通して、その領域の看護を勉強することができるだけでなく、実習の際に指導者との調整がしやすいと感じる</li> <li>実習場所である病棟での研修を通して、別の病院を知る経験になったと感じる</li> <li>短期間でも研修に参加することを考えている</li> </ul>
	自分が看護教員として不足と思う臨床看護について研修を行う必要がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分のつまずいているところを解決し、自信に変えていけるように、教育に関わる研修を受けたい</li> <li>臨床経験のない分野での実際が分からないので、臨床での経験知を高めるための研修が必要であると感じる</li> </ul>
8. 看護教員としての継続研修の必要性	看護教育の全体と部分がわかったうえで教育にあたる必要がある	看護基礎教育は全体と部分がわかったうえで教育しなければならない
	看護教員として授業検討会が必要だ	授業案検討会をやっている
	看護教員としてリフレクションが大事だ	教員としてリフレクション(内省)することが大事だ
	看護教員として最新の臨床を学ぶ必要がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>かつての自分の臨床経験では、現在とは違ってきているので、不足を感じたり不安に思ったりする</li> <li>臨床のことがわからなくなるので、研修で今の臨床を学んでくれることが大事だ</li> </ul>
9. 看護教員として専門性を追求して成長していくことの必要性	看護教員として最新の知識を学ぶ必要がある	最新の知識を学ばない状態で、教えることは難しいと感じる
	看護教員として成長していく時、今、どのようなことが自分に必要かわかりたい	<ul style="list-style-type: none"> <li>新人の時はリアリティショックだった</li> <li>自分が時々どこにいるのかわからなくなって、この先に不安を感じることもあり、この先、方向性がみえてほしい</li> <li>自分が教員として成長していく上で、今、どのようなことが自分に必要なのかわからない</li> </ul>
	看護教員としての将来像を少しずつ描く	<ul style="list-style-type: none"> <li>何となく周りの進み方が見えてきて、今ようやく、この先必要とされることについて考えていけるところに立った状態である</li> <li>臨床経験のない分野の講義や実習をやり切ろうということを目標として、1年間を乗り切ってきたけれども、今年は、もっと上の目標を目指したい</li> <li>前の職場と比較すると、システム化されていることで、意図的に準備がなされるため、安心して仕事ができる環境である</li> <li>今の段階で、はっきり将来像が見えるわけではないが、これから少しずつ将来像を描いていければよいと思う</li> </ul>
看護教員として専門性を追求していく必要がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員は専門性を追求していくことが必要である</li> <li>教員として専門性を追求していくことでぶつかるともあるし、ぶつかることが教員というものだとわかって、やっていけると思った</li> <li>教員は看護実践能力と教育力のバランス大事だ</li> <li>権威的な看護教員は、学生に内発的動機付けをできるような教え方をしていない</li> <li>学生の体験を教材化できない教員は、看護実践能力も薄い</li> </ul>	

表5 既にキャリア別到達目標導入している養成機関の研修内容別実態(実践及び思い)

	5年以下	6～9年	10年以上	成果	課題	
① 教育能力向上	7校ある中で定期的に新人が集まる場を設けてほしい	カテゴリ会議ってのが、その科目ごとの会議で、調整	N(都道府県)の場合、転勤が多いので、初めて会う子を実習場に連れていくじゃないですか、私が講義した子じゃない子を連れていっているの			
	授業が春から始まるんですけども、向けてこれから授業でどんなことをやっていくとか、どんなところを工夫したかという話合いが、T県で入職した先生方	教授案とか、そういうを出して、みんなで共通認識をしながら進めていく	去年の前任校の2年生に母性の看護課程の指導を新しい方式でやってきているから、それがどういふふうにならされているかって			
	教員という立場で、基本的な、基礎的な看護の知識と技術とかがあってのあたりが、キャリアアップ	教育力の中にはさっきの臨床経験能力ももちろん入ってくる	7校学校があっても、結局、入れ方がちよこつとず違ったりとかして同じカリキュラムだったりとか、何か同じシステムなんだけど、何かちよこつとず違ったりとかしている部分があって			
	授業は、*協力体制の対応を取って*今指導	研修会、知識は詰めに行ったりはしないと、やっぱり追い付かない	今までみたいに高校卒が来ているわけじゃなくて、中には大学院卒の学生がいるわけですよ。もう40代とかね、下手すると50代ぐらいの人がいるから、ああ、やっぱり私たちが本当に根拠のあることをしっかり教えなかったら、絶対あの人たちは納得しないだろう			
	教育的な技法っていうんですかね、そういうところでは何か勉強したいなっていうのは感じるところですね	実習指導がずっと年間入っていて、なかなか平日にいい研修があっても行けない	専門学校って、20人の教員がみんな同じ方向を向いてできるじゃないですか			
	N(都道府県)の同じ病院を、7校のうち結構4校5校と使っているの、精神科の実習を担当している教員と、実習控え室が同じだったりする	目に見えないような、私たちが意味付けをしなくちゃいけないっていうようなそういう看護観なのか、教育観なの	基礎が自分は専門だと思ってますけど、その後、成人、小児、子どもを産んだから小児の*主任になると、母性を、子どもを産んだからということで、精神、すべてですね、最初は戸惑うことも多かったんですけど、それによっていろいろ見えてくるものがあって、全体が見えてきた			
	同じカテゴリで、特に授業研究		新人教育のことを悩んでるんですけど、こう、カリキュラムを作っていくのに、やっぱり基礎技術をやらせないといけないんじゃないかなって思うんです、看護技術と看護行為と違うっていうことを教員が意識しないといけない			
	実際、教育技法とか*看護方法というよりも、もっと看護自体を見直しているような状況		臨床の場で、こう、その人の個性を踏まえてやる看護行為と、この看護技術っていうのは原理原則を踏まえた、内容をきちんと押さえて			
	教育手法みたいなところですかね、そういうところを何か少し勉強したい		教員としての3年目のときに、やっぱり絶対許せない指導者の言動でもって、学生を守るとか育てるっていうのがすごく意識化			
			1年目というのは、自分の授業のことだけじゃなくて、実習もやり、看護課程という、今までそういう指導もしたことがなく			
		ここにいる先生たちはみんな妥協して、専門じゃないところを担当してくれている				
		それぞれが抜群にできて駄目で、教育能力、看護実践力がなければ、看護実践力と教育能力のバランス				
		臨床の場に、同じことを見て、学生が体験していることを教材化できない				
		何か充電しないと、アウトプットばかりで、で何かこう狭くなっていく。怖いんです、教えるのが				
② 看護能力向上	夏休み期間ですね、N(都道府県)の精神科の病院の方で短期臨床研修っていうことで、9日間だったと思うんですけども、病棟の方に実際に行って、臨床のナース	臨床経験がきちんとあって、その中で、知識がやっぱり熟知	学生と一緒に基礎実習とか行ったり、成人の病棟に行って「はあ、今はこういふふうで治療してるのか			
	8月に行かせてもらって、いろいろな研修	在宅、経験がやっぱりないというところの弱み、臨床研修に行かせてもらいながら、実習担当しますが、やはり現場で自分も学びながら	「私たちは臨床が自信がないから嫌です」って教員たちが答えたんですけど臨床に自信がなくて、よくね、教えていられるなっていうふうなこと			
	5年に1回とかの悉皆研修にはなっている	臨床経験がないと、すごくそこが弱みにつながって、やっぱり教育というところは素地ができてないというふうで考える	N(都道府県)って短期臨床研修ってやって、教員がどうしても臨床から離れていて、T県のことは、ああ、臨床のことがよく、ほら、分かんなくなっちゃうでしょう。だから、できるだけこういう研修に行って、今の臨床では「ええ、こんな新しいことやってるんだ」っていうのを学んでくるんです			
	また数年後に。去年の目的は、何か臨床の技術の	プレゼンテーション能力	看護実践能力も薄いんです			
	1年目、2年目が行っている	完全に満足のいく授業というのは本当に10に一つもつとこうすれば良かったんじゃないか	忙しい臨床で、ここまで物理のこと考えてやれないよねっていうのは、何となく分かるんですけど、でも、やっぱりこうやって、短期臨床研修に行ったときに、すごい看護婦さんたちやっぱり喜んでた			
	教員の側でまた病院に行くところと見方が変わるのかな	プレゼンテーション能力っていうのは、例えば教授案を作ったときに、この内容をどう伝えていくとか	それぞれが抜群にできて駄目で、教育能力、看護実践力がなければ、看護実践力と教育能力のバランス			
	夏に勉強させてもらった	教育力の中にはさっきの臨床経験能力ももちろん入ってくる	10年以上たった人が、看護実践能力がなくなるからっていうので、一応この研修ですね、幹部研修は悉皆研修になったんですよ。2～3年に1回行かなければいけない			
	その領域の看護を勉強するという意味もあったんですけど、自分が実習指導に行っている病棟だったので、その人間関係も築いてくれた	全くやっていない領域に行くとなると、応用が利かない部分	中堅の人たちの臨床経験を補充する制度はあるんです。でも、みんなやっぱり行きたくない			
	急性期を臨床ではやっていたので、今回、回復期に*臨床実習で勉強させていただいて	人的な問題、その前段階を作ってくれという状況とか、その科目を担当するために、やはり自分の備えを欲しい、最低限。それが1週間であらうと2週間であらうと、職場の状況	行ってほしい人は行かないんです。で、前向きな人は行っているっていうか			
	短期の臨床研修で、T県は確か3カ月みたいなのがあるんですけど、この科には2～3カ月間という。そういうところに行って、臨床でのやっぱり経験値みたいなところを高めるというの、一つの手のかな	自分の臨床の経験でもう時代はストップ、教員としてずっとこのままやっていけるのかな、不安	短期研修に行くには自分の夏休みとかを			
		教員経験がまあ3年以上たったとき期間で研修に行く	普通のときに行けないんですよ			
			普通のもし時間帯に行けるのであれば			
			人に余裕があれば、今そういう余裕がない			
			もともと看護教員になりたい人は、なってほしい人は、看護実践力をちゃんと付けてきてほしい			
			前のように、臨床をやっている人からこう来るとかね			
		N(都道府県)の教員と病院の組織が変わっちゃって、もう病院側では出せない状況				

表5 既にキャリア別到達目標導入している養成機関の研修内容別実態(実践及び思い)

	5年以下	6～9年	10年以上	成果	課題	
③ 研究能力向上	多分経験年数と、そういう研究費、授業研究っていうので、精神の 카테고리も協力しているんですが、いろんなカテゴリーがあって、その授業研究ということで、7校で集まって、授業の検討		研修とかに結構積極的に、週末とかはなるべく行くようにしています			
	授業研究っていうので、精神の 카테고리も協力しているんですが、いろんなカテゴリーがあって、その授業研究ということで7校集まって、授業の検討			N母性衛生学会の幹事とか		
				N(都道府県)の大学の産婦人科の教授の先生、プラス、看護大学の教授の先生たちとかかわりの中で、いろんな新しい風っていうか、うちの大学ではこうだとか、いろんな情報をお互い交換したりとかして、セミナーとか、あと、学会の運営とか		
				研究をし、っていうか		
				大学はこれ、放送大学です		
				そばに寄り添っていてほしいっていう感じだった(大学院)		
				大学院は、あのね、やっぱり学生たちの高学歴化		
				研究方法っていうのもある程度分かってないと、ですよ。まあ、相手だつて大学院で修論を書いてきてる		
				研究手法とかも私たちがいる程度知ってないと、多分、大学院卒の学生に太刀打ちできないで		
				専門性を追求していくのがやっぱり教員		
				新しい技術のことは、N(都道府県)の先生の中、自分がいた学校だけじゃなくて、都の先生の中でやっている先生がいる、学校を超えて、都の中の教員にはそういうのを勉強している人がいる		
				専門をわざと取ってないんです		
				専門認定、何なんだろう		
				教員としてのニーズは、専門性というところもありますし、専門性以外っていうところもありますよね		
	④ マネージメント能力向上	N(都道府県)は病院から来て1年学校で、その後も、次の年に大体教員養成	システム化がきちんとされている		教員養成コースを出ていないで、臨床からすぐ来た先生が担任だったんです。次の年に教員養成に行ったんですけど、	
今も2年目、去年1年間学校で、今年、今、教員養成に行っている先生員養成に行っている先生		調整能力っていうのはすごく必要		N(都道府県)ってすごく恵まれていらっしやるなある意味、キャリアアップしていくことのいろんなシステムっていうのがあって、例えば臨床研修に出られたりとか、あと、大体おおよそ何年目にはこういうふうなところまでっていう、何だろう、目指すものが可視化できてるように思ってるんですけども		
		うまく教員が見つないでいかないと、やはり学生に不利益になってしまう		研修をやるのが教育にも生かせるだろうという、で、新しい、いろんな、それプラス、外の先生たちと、そういう学会の役員とかやっていると、いろんな教育方法だとか、いろんなことも聞けるっていうことが教育にプラスになったり		
				大学院の修士に来ない？ 修士に来て、こういうこと研究しない		
				新入社員試験、新入社員研修か。公務員としての心得とかね、何かそういう、地方公務員法とはみたいな研修会がある		
				去年の最終の厚労省の幹部に行かせていただいた、教務係長で、正直、管理的な能力が全くないんですけど、皆さんが本当にいい人たちばかりなので、助けられている		
				やっぱり教員はいろいろ言わなきゃいけない、いろんな意味で、教員に対しても、学生に対しても、やはり自己の何か考えは主張していかなければいけない職業		
				臨床経験を何らか持っている人の看護教員で新人っていうのは、もう1～2年を新人として、3年目からは一人前として育てないといけないっていうところで、T県では設定をそのようにしているんです		
				ずっと何年経験しても下っ端というか、先輩たちがいるところにいつまでたっても甘えている部分はあったのかな、学内にいると、意見とか思っているも言えないというか、言わないというか、言えるような感じではなかった		
				実習指導の場面では、病棟のやり方とか学生への指導の仕方できちっと先輩や上司に相談していくと病棟の人とも変わるんだ		
				技術の校内実習とか、何かプラスのことがたくさんあって、やらなきゃいけないことがたくさんあって、それにもう参ってしまった		
				学校を超えて、すごい人たちがいるっていうのが、この都のすごいところ		
				役職に伴った仕事の力量が必ずしも一致していないゆえに、悩みがあるのかしらね		
				新人教育のあり方が問題		
				後輩は育てたいな		
⑤その他			N(都道府県)はコミュニケーション能力を育てないといけないんじゃないか			

表 6 看護教員経験 5 年以下の構成要素クラスター分析の結果

構成要素クラスター 1 【学生のレディネス 対応・実習指導】	構成要素クラスター 2 【看護教育の基盤】	構成要素クラスター 3 【経験に基づく臨床知】	構成要素クラスター 4 【看護実践能力】	構成要素クラスター 5 【経験知】	構成要素クラスター 6 【講義】
1 1 年目	教育	研修	看護実践能力	経験	講義
2 いろいろ		現在			
3 学校		時間			
4 学生		実習			
5 患者		前提			
6 看護		臨床			
7 看護教員		臨床経験			
8 今年					
9 指導					
10 自分					
11 実習指導					
12 授業					
13 上司					
14 状況					
15 専門学校					
16 相談					
17 担当領域					
18 中堅					
19 不安					

表7 看護教員経験6～9年の構成要素クラスター分析の結果

構成要素クラスター1 【教育方法】	構成要素クラスター2 【専門領域外の科目 への挑戦】	構成要素クラスター3 【看護教育実践能力】	構成要素クラスター4 【コミュニケーション 能力】	構成要素クラスター5 【相談・支援】	
1	いろいろ	専門性	看護実践能力	コミュニケーション能力	経験
2		担当領域		一緒	相談
3				学校	
4				学生	
5				看護	
6				看護教員	
7				教育	
8				経験	
9				研修	
10				現在	
11				時間	
12				自分	
13				実習	
14				授業	
15				状況	
16				全然	
17				知識	
18				中堅	
19				不安	
20				勉強	
21				臨床経験	

表8 看護教員経験10年以上の構成要素クラスター分析の結果

構成要素クラスター1 【ジェネレーション ギャップ】	構成要素クラスター2 【モチベーション】	構成要素クラスター3 【看護実践能力の 維持・向上】	構成要素クラスター4 【業務分担に伴う スキルの強化】	構成要素クラスター5 【コミュニケーション・ マネジメント能力】	構成要素クラスター6 【時代の変化と社会の ニーズに沿った看護 教育】	構成要素クラスター7 【専任教員としての 資格要件】	構成要素クラスター8 【エイジングに伴う 限界】	
1	1年目	仕事	キャリアアップ	いろいろ	コミュニケーション	全体	大学院教育	基礎
2	一緒			希望	看護		大学教育	今度
3	一番			研修	看護教員			
4	学校			研修会	子			
5	学生			参加	時間			
6	患者			程度	上司			
7	看護師				全然			
8	看護実践能力				卒業			
9	気持ち				卒業生			
10	技術				大事			
11	教育				転勤			
12	経験				病棟			
13	現在				臨床経験			
14	現場							
15	最初							
16	在宅看護論							
17	指導							
18	自分							
19	実習							
20	授業							
21	状況							
22	専門学校							
23	専門性							
24	前提							
25	大変							
26	担当領域							
27	知識							
28	中堅							
29	年							
30	部分							
31	変化							
32	勉強							

表 6-1 看護教員経験 5 年以下のクラスター1『学生のレディネス対応・実習指導』に関する語り

調整なんですけども、 <u>学生のレディネス</u> を考えて、臨地実習に行った時に <u>学生のレベル</u> で求めなきゃいけないレベルを、臨地の方はそれ以上に求めようってする考え方がある。
学生で、今度3年生でまた実習領域の実習でご一緒した時に、こんなに <u>成長するんだ</u> 、人ってこんなに成長するのかっていうのは、本当にそれが手に取って分かる。
例えば実習の指導方法。 <u>いろんな学生さんがおられて</u> 、学生が患者との関係ではないが、患者と対峙する時に悩まれたりとかね。いろいろと学生さんが悩まれることに対して、アドバイスができない。
授業でこんなことをやっていくとか、 <u>どんな所を工夫したか</u> というような話し合いが、入職した先生方と話し合ったりとかしていました。
自分の与えられたカテゴリーの授業と実習とかっていう所では、 <u>いろんな幅がない</u> といけないのかなというのがやっぱり、そういうふうに最近感じる。
実習指導でスムーズに指導がいかなかった学生に当たった時に、 <u>初めて独り立ち実習指導</u> みたいな時にそういった学生に当たったので、自分の指導力のなさで上手くいかないのか、学生側の受け入れで上手くいかないのかっていう区別も勿論つかない。
それぞれ基礎看護の担当なので、実習指導では精神で、その行っている科自体は自分が勤務していた所ではない。

表 6-2 看護教員経験 5 年以下のクラスター2『看護教育の基盤』に関する語り

教育というものに、 <u>しっかりと地に足を着けて携わって</u> たつてことがなかったものですから、こちらの学校でちょっと教育を学び直そうかなと思って、働いています。
臨床でこう教えたい。教育だけの考え方ではなくて、 <u>看護の世界は臨床と教育がやっぱ両方合わさって学習</u> していかないといけない所で、 <u>教育だけに入ってしまうと、臨床能力が落ちてしまったり</u> とか、新しいことに疎くなってしまったりするので、それが嫌だった。
どの先生方もすごく忙しいので。驚異的ですよ、4月、5月はどこも。特にレギュラーの子は、真っ白なキャンパスの上に言ったことがそのまま吸収されていくので、 <u>教育としては学習者の立場に立てば</u> 、あまりいい加減なこととはできないとは思っていました。

表 6-3 看護教員経験 5 年以下のクラスター3『経験に基づく臨床知』に関する語り

この科には2~3か月間という、そういう所に行って <u>臨床での経験</u> 知みたいなところを高めるというのも一つの手なのかなと思います。教育手法みたいなところですかね。そういう所を何か少し勉強しないと教員としては駄目かなって思う。
それにはもう私22年も <u>臨床を経験</u> してきたんで、今更学校で踏ん張るっていう気にはあまりならない。
都立の同じ病院を、7校のうち結構4校5校と使っているんで、同じ都の精神科の実習を担当している教員と、実習控え室が同じで、相談させていただいたりとか、今日こういうことがあったけど、どうしたらいいですかねみたいな話で、 <u>こうやったら？</u> <u>こうやって指導したらいいんじゃないの</u> とあって、 <u>すごく参考にさせて</u> いただいています。
この記録の書き方一つであったりとか実習の仕方一つで、3年生の10月とかになると、こんなにすごい、こんなに成長できるんだっていうのが見れるのがすごい嬉しいというか、良かったなというのは思います。
困っていることは、研修を受けたのが、十数年、まあ10年前になりますので、教育も大分変わってきてます。改めて講習とか研修とかを受けない状態でここに来ているので、教育の教育課程であるとかっていうのに、戸惑いがある。

表 6-4 看護教員経験 5 年以下のクラスター4『看護実践能力』に関する語り

言ってることと、実際にやらせてもらえることも違うし、そういうふうに育てた子が <u>臨床で看護実践に役に立つ</u> かと言ったら疑問が残る。
私はやっぱり臨床がやっぱり長くて、学校は行ったんですけど、やっぱり実際に <u>看護実践を通して</u> 学生と関わったりとか、やっぱり指導するのっていうのは、やっぱり難しいなっていうふうなのはよく考えます。
看護教員になると、やっぱりその実践能力とかっていうのがだんだんこう、自分が実際に看護実践は行わないので、とやっぱりそこをどうするのか、 <u>教育実践は行うんだけど、看護実践というのが行わなくなってしまうので</u> 、やっぱりそこを継続してどういうふうに考えていくのかなというふうなのはあると思う。

表 6-5 看護教員経験 5 年以下のクラスター5『経験知』に関する語り

皆さんが言っていた通り、私たちに <u>経験知</u> とか、あと臨床での知識、技術がなければ学生に教えられない。
看護教員というのは、臨床にいる特定の分野だけで仕事をしていればいいが、 <u>看護学校の教員は、いろんな分野一応カテゴリー</u> という形で決まっているけれども、基礎の方に行ったり、基礎の授業もやったりすることもあります。
明日にでも臨床に帰らせてほしいです。向いてないと思います。希望で教育に携わりたいと思って来れば、きっとモチベーションももっと上がるのかなと思うけど、組織の中で異動というのに乗かって来たので、なかなかモチベーションが上がらない。

表 6-6 看護教員経験 5 年以下のクラスター6『講義』に関する語り

本当にですね、 <u>講義の組み立て方</u> とかそういう部分が全く分からなくてすごく苦労した。
1 個 1 個の自分のする分の <u>講義</u> とか、 <u>責任持ってはしてるつもり</u> ですけど、そういう大きなクラスを動かすとなったら、ちょっと難しいなっていうのがあって。そこら辺が、まだそこら辺の業務は分っていないと思うので。
今まで、そこの1年生で割に増えたっていう形なんで。多いクラスと少ないクラスで、やっぱり <u>講義に行っても反応が違ったり</u> とか、グループワークね、してもらってもちょっと違ったりっていう。

表 7-1 看護教員経験 6~9 年のクラスター1『教育方法』に関する語り

教員養成へ行ってからは、いろいろ考えて、 <u>あれもこれも詰め込むのではなく一番この科目で伝えたいの</u> かというのをいろいろ考えながらやっているとと思う
教科書を教えるんじゃなく、 <u>教科書はあくまでも活用するもの</u> として、何か調べられるような、 <u>臨床に出てからとか実習で活用できるような知識</u> もいれたいなと思って、いろいろやっている

表 7-2 看護教員経験 6~9 年のクラスター2『専門領域外の科目への挑戦』に関する語り

専門領域を決めるんだったらその <u>領域だけに固定してほしい</u> が、現実にはなかなかそういうふうにはいかない
専門性を高めようとかっていうふうにするのであれば、それに対する人数とか教育者側のレベルっていうのも上げていかなきゃいけない。
<u>専門領域のところ</u> でというふうにも考えてもなかなかできないので、自分の課題を持って研修に行くしかならないのかなというふうには思っている
<u>担当領域の希望は聞かれるんですけど</u> 、その通りにはいかない

表 7-3 看護教員経験 6~9 年のクラスター3『看護教育実践能力』に関する語り

教員としてのキャリアアップに必要なことで、看護実践能力って絶対に必要不可欠だになっていうのはすごく思っています
本社から下りてきた分があって、これは看護師の看護実践能力の指標として下りてきたので、教員の分はないということで、学校の家を作られて、これでいくわねっていうのももらっただけなんで、どう活用しようっていうのはない

表 7-4 看護教員経験 6~9 年のクラスター4『コミュニケーション能力』に関する語り

生活体験だったり、コミュニケーション能力だったり、10 年前と比較すると、 <u>共通の言語が通じなかつたり共通の体験</u> を持ち合わせてなかつたりする
そんなに実際は気にすることはないんですが、一番 <u>学生はやっぱり関係性はちゃんと作れるのか</u> という心配が大きい
臨床で患者持つ時に、目先のことだけに学生がとられることがなく、この人にターミナルなり、高齢者で認知症で寝たきりという方でも、どうこの人が過ごせばいいのかっていうようなところが看護の教育の中では求められてくると思う
研修だけではなく、企業が開催しているものとかに、他の先生から誘いがあつたりとか、今度こういうのがあるので誘われて、一緒に行ったりとかして学習してます。
調整能力はすごく必要となっていて、自分だけが教育するわけではなくて、看護職に就くというところでは、現地実習が多いので、現場のやりとりっていうところがすごく大きい
違和感を感じるものの、自分もアクションする勇気もなく経過しています



表 7-5 看護教員経験 6～9 年のクラスター5『相談・支援』に関する語り

確認できる相手がいないというか、 <u>相談する相手がいないので</u> 、もう手探りでやって
<u>先輩教員に相談に行ったりとかという形でやっています</u>
ラッキーなんです。 <u>プリセプター</u> みたいなあのときはやっぱり何かこうお互いに相談したりとか、話はしてたり
<u>オープンにして相談できる場</u> があってもいいのかなというふうには感じています

表 8-1 看護教員経験 10 年以上のクラスター1『ジェネレーションギャップ』に関する語り

<u>学生にそうやって言葉をかけてもらって支えてもらって</u> 、逆に頑張らなきゃと思って、モチベーション、気持ちを高めていくっていうか、そういうところもあります
自分ではそんなに学生が辞めたい <u>気持ちだったことも知らず、気付かないのに</u> 、そういうことで思いとどまってくれたっていうようなのも知って、体の調子がよくなったらやっぱり教員やりたいなっていうふうに思ってしまった
クラス運営を、学生をどういうふうにしていきたいかと思った時に、一緒に学年を担当する方でも、考えが合わなかったりだとか、ほとんど実習に出てるので、学年と関わる時間が殆どない。授業に入ってるって言うことが多くて
新人教育のことを悩んでるんですけど、カリキュラムを作っていくのに、基礎技術をやらせないといけないうじゃないかなって思う。基礎の演習をきちんと、学生、私の考え方としては看護技術と看護行為と違うっていうことを教員が意識しないとイケなくて
60 が定年だと思ったら、あと 5 年間何をしようかといった時に、助産院をやろうかっていうので今そういう研修をやるのが教育にも活かせるだろう
教育もそうやって <u>通算 11 年位やっても</u> 、 <u>学生との関係性とか</u> 、思うように学生が伸びていかないとか、 <u>成果が上がらなかった時とか</u> 、そういうところで目標とか指導方法とかは話し合いはするんだけど、 <u>自分モチベーションが下がってきた</u> 、 <u>気持ち下がってきたりとか</u> 、そういうところですね

表 8-2 看護教員経験 10 年以上のクラスター2『モチベーション』に関する語り

看護大学がいっぱい増えている中で、今の時代、今の看護をまだ背負っている人達は、看護大学を卒業している人ばかりではないという現状を考えても私が年が年で、あと何年かでリタイアを考えた時に、 <u>やっぱり看護専門学校は専門学校の良さがあるんじゃないかなってところを考えた時に</u> 、それを考えた時に専門領域だけでなく、基礎看護学があって、その上で母性看護学があるっていうような考え方で仕事をしていきたいなっていうふうに私は思っている
学生のいい所に、精神科をやったこともあって、成長に関わる仕事だっていうことは思っていたので、 <u>いい所が見えるようになっていって</u> ということと、コミュニケーションを大事にしてたっていうのが印象としてあって

表 8-3 看護教員経験 10 年以上のクラスター3『看護実践能力の維持・向上』に関する語り

病院の方は病院の方の看護師ってキャリアアップの形態がはっきりしてきます。 <u>専門看護師とか認定看護師</u> とか、いろいろ行けたり、その進学をサポートがあつたりすると、もう看護師としてキャリアアップできちゃう
先生と違って、個人的なキャリアアップのための教育を受けたりですとか、努力はしてこなかった方なので、看護教員も大学をね、大学卒の教育を受けておくことが必要だと、今更ながらにそう思っています。私は専門学校卒で、大学も通信なども受けていない
新しい取り組みで、根本は看護の在り方は、ベースとしては教員も大切にしたいのはキャリアの中で培ったこともあるので、学生に反していくかっていうところで、その <u>リフレクション</u> というかそれが大事なんだと思います
書いたものであるとか、評価をするんじゃないくて、実際の実習の中で学生のモチベーションを上げたり必要なことを学生に考えさせるようにしていくのがとても難しくて

表 8-4 看護教員経験 10 年以上のクラスター4『業務分担に伴うスキルの強化』に関する語り

自分の意見があるから、それに対して言うっていう、そういうのもあるし、教員はいろいろ言わなきゃいけない、いろんな意味で教員に対しても、学生に対しても、 <u>自己の考えは主張していかなければいけない職業かな</u> っていうのが分かりました
毎年変わってきているので、1 年目はいろいろ教えてもらいながら、2 年目、3 年目、4 年目、その都度自らも学びながらっていう感じなんですけれども
実習調者という仕事を担当させてもらって、 <u>校外の施設との関わり</u> とか、そういう所が入ってきておりますので、いろんな問合せとか向こうからの提示があった時に <u>速やかに返していく</u> のか

表 8-5 看護教員経験 10 年以上のクラスター5『コミュニケーション・マネジメント能力』に関する語り

3 年目位の時に実習、授業では楽しくやっていたところに、 <u>だんだんコミュニケーションが何か苦手な学生</u> だとか、増えてきてやはりコミュニケーションがやっぱり取れなくて
先生方って沢山仕事をしてるんだっていうことと、臨床の実習場なんかに行った時に、病院、施設側と上手くやっていくために、 <u>頭を下げたり</u> 、 <u>コミュニケーションを取ったり</u> 、そういったことが重要なかなっていうのを、1 年目の時は特に強く感じました

表 8-6 看護教員経験 10 年以上のクラスター6『時代の変化と社会のニーズに沿った看護教育』に関する語り

<u>全体の基礎看護教育</u> っていうところのどこの部分なのか、関連しているから協力し合わなきゃいけないかっていうのが、 <u>専門認定を作る</u> ことによって弊害が起きていると思う
大体全体が見回せて、 <u>今何をやればいいのか</u> なあ、みんな何してるのかなあっていうのが多少見れるようになってくるのかなっていうふうには自分では思ってるんですけどもね
ここだけには限らないです。 <u>授業の専門の所で関係するところの研修は</u> 、近くとか離れた所だったりもするんですけども、 <u>初級コース、中級コース、上級コースと全部行かせていただいて</u> 、反映するところなので

表 8-7 看護教員経験 10 年以上のクラスター7『専任教員としての資格要件』に関する語り

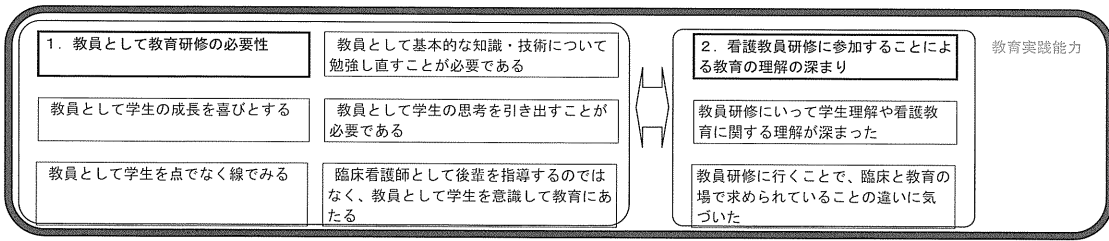
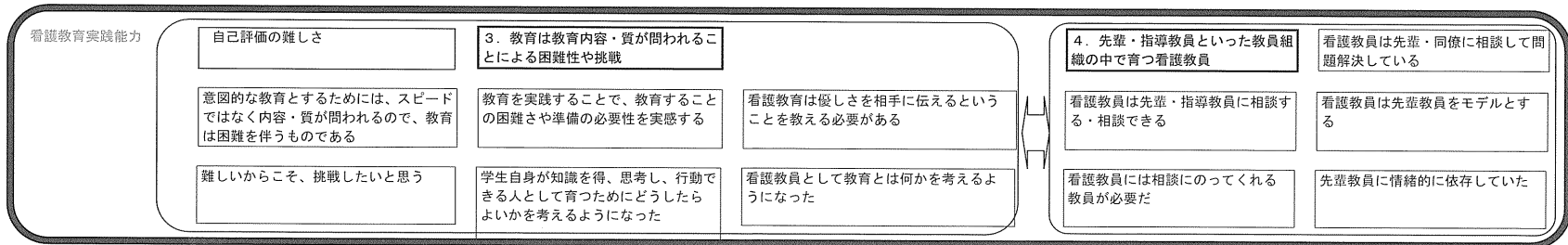
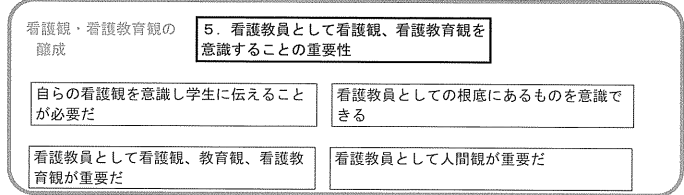
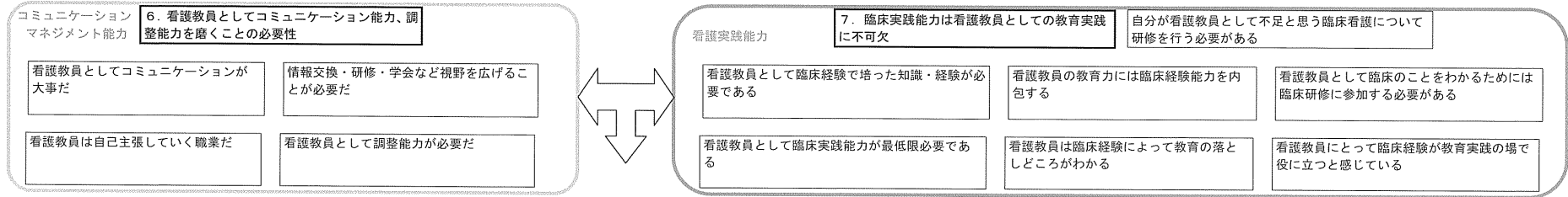
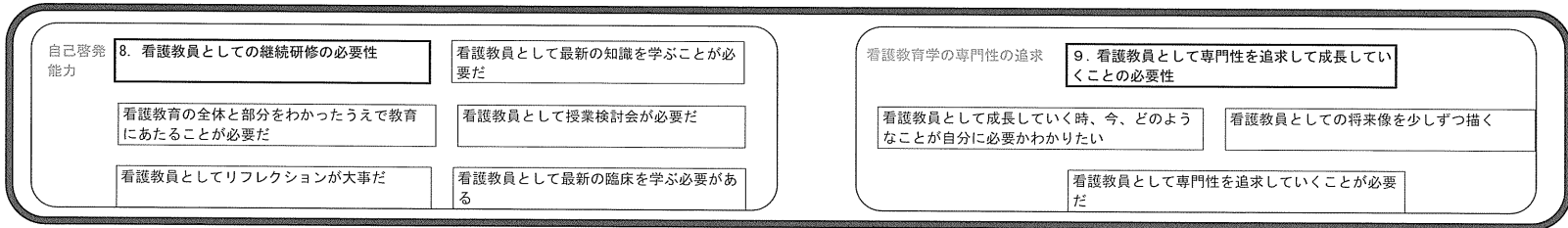
<u>研究手法</u> とかも私たちがある程度知ってないと、 <u>多分大学院卒の学生に太刀打ちできない</u>
一緒に大学に行っている仲間内でもやっぱりいろいろ差があったりして、 <u>教育って何だろう</u> なって。看護の世界は特に私は思ってるんですけど、看護学で博士課程に行っているわけではなくて、他の分野で行ってるんです。看護に活かせる分野ではあるんですけども
よその職場に行こうとかっていうことは考えてないんですけど、実感はしている。そういった面で、 <u>修士とか博士とか取って</u> いこうってするのは、まだ何て言うか、 <u>みんながそう</u> なってしまえば普通に行けて、自分の教育実践に役立てていこうっていうのが普通になれば別なんでしょうけど

表 8-8 看護教員経験 10 年以上のクラスター8『エイジングに伴う限界』に関する語り

自分の場合は本当に困っていて、 <u>人がいないところに来てくれてありがとう</u> みたいな感じで、 <u>手取り足とり</u> で全部基礎の技術に入った
それからまた新たに、いろんな今度実習をする上で、 <u>実習ができない学生を</u> どうしていったらいい
<u>50 代を越えて</u> 見えている範囲があるんで、今度はまた <u>学生がすごい</u> やっぱり年齢差がいっぱい出てきて、私がいた時代はまだ 18 歳で



図1. 調査協力校の国内分配置図



太字：カテゴリ、細字：能力

図2. 専任教員のキャリア別達成目標を導入している看護教員のキャリアアップの要素と能力